東京未来大学研究紀要　2010年　第3号　pp.85-95

保育園における「気になる保護者」の現状と支援の課題

―足立区内の保育園を対象として―

藤後悦子・坪井寿子・竹内貞一・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子*

Today's Situation and Problems of the Support to “Problem Parents” in Day-care Centers in Adachi Ward, Tokyo

Etsuko Togo, Hisako Tsuboi, Teiichi Takeuchi, Teruyo Fukawa, Mayumi Tanaka, and Keiko Sasaki

要約

近年保育現場では，些細なことでクレームを言う保護者や子どもへの不適切な対応が顕著な保護者が増えてきており，これらの保護者を総じて「気になる保護者」として表現することが多くなった。しかしながらその言葉が示す内容は幅広く,「気になる保護者」の実態は明らかではない。そこで本研究では，足立区と本学の協力の下，区内の公立私立保育園に対してアンケート調査を実施し，「気になる保護者」の実態を明らかにすることを目的とした。その結果,「気になる保護者」は，子どもの年齢が上がるごとに増加すること，養育態度・親子関係が最も気になる行動として保育者に認識されていることが明らかとなった。また，保育現場が連携を求める専門職としては，心理士と精神科医が上位となった。これらの結果を踏まえ，今後どのような支援が可能であるかを検討した。

キーワード

気になる保護者，保育園，特別支援

問題

1999年に少子化対策の具体的実施計画として，新エンゼルプラン（厚生労働省，1999）が施行された。これは，仕事と子育てを両立させるための雇用環境の整備である。これによって保育現場では，子どもへの発達保障とともに，保護者の就労支援もその業務として求められるようになった。具体的には,①0歳～2歳までの低年齢児の受け入れの拡大,②いろいろなニーズに応える保育サービスの実施,たとえば延長保育，休日保育，乳幼児健康支援，一時保育などが挙げられる。このように保育現場は，現在，地域の子育て支援の中核を担う役割となっている。また保育現場の特徴としては，日常の保育でも朝夕の送迎時に保護者と直接話ができるためコミュニケーションの機会が豊富にあり，保育者は保護者の様子を把握しやすい。

このような特徴を持つ保育現場において,近年「気になる子ども」という表現とともに「気になる保護者」という表現が頻繁に使われるようになってきた。そして，この「気になる保護者」への対応に苦労しているという保育者の現状も報告されている（望月・北村・大久保・田邉・小尾・塙，2008；重田，2007）。しかしながら，そもそも「気になる保護者」とはどのような保護者を指すのかその定義は明確ではない。久保山･齊藤･西牧･當島･藤井･滝川（2009）の研究では,「気になる保護者」の内容について，幼稚園では「子ども観」,「不安・心配」,「過保護」,「園への無関心」のカテゴリーが高い割合を示したのに対し，保育園では,「子どもに無関心」,「保護者中心」,「乱暴」,「保護者の病気・病的状態」のカテゴリーが高かった。一方,「気になる保護者」の最たる例は，虐待を疑われる保護者であると考えられる。虐待の早期発見では，保育者が第一発見者となるケースが多く，保育者がどのように「気になる保護者」を感じ取り，どのように支援につなげているかという実態を把握することは今後の子育て支援に有効であると考えられる。一方,望月ら(2008)は,保育者が虐待を疑った際の苦慮として「保護者との

＊　足立区障がい福祉センター「あしすと」

コミュニケーションの取り方が難しい」,「保護者とのトラブルによる保育士の精神的苦痛」,「虐待の認識や価値観の違いによる対応の難しさ」などを指摘しており，保護者との関係性形成は保育現場の課題である。

本研究で扱う「気になる保護者」とは，虐待に限らず，クレーマーなどを含むより広い意味で，いわゆる保育者が普段感じ取っている「気になる保護者」を想定している。しかしながら保育現場で用いられている「気になる保護者」が，どのような内容の気になる行動を有しているのか，そしてどの程度の数が存在するのかなど,「気になる保護者」の詳細は明らかになっていない。「気になる保護者」の実態を明らかにすることは，最初に述べたようによりよい子育て支援を行うためという理由もあるが，それ以外にも保育者のストレスを減少させ，よりよい保育を保障するためという側面もある。

以上より，本研究では，東京都足立区の保育現場を対象に「気になる保護者」の実態を明らかにし，どのような支援が可能であるかを検討することを目的とする。

方法

調査は, 足立区の協力の下, アンケート方式で行った。アンケートの対象は，足立内にある公立・私立の保育園 90 園とし，2008 年 10 月から 12 月にかけて，足立区障がい福祉センター「あしすと」を通じて配布・回収を行った。アンケートの方法は，竹内らの論文（2010）と同様の手続きである。

アンケートの構成は,（1）保育園の概要,（2）気になる子どもに関するアンケート,（3）気になる保護者に関するアンケートの三部構成であった。アンケート（1）は，原則として保育園の園長あるいはそれに代わる人による代表記入で行った。調査項目は,（A）職員の年齢構成,（B）平均在職期間,（C）主な退職理由,（D）障害児枠の子どもの数,（E）保護者の少なくとも一方が外国籍である子どもの数,（F）気になる子どもの集計値,（G）気になる保護者の集計値の計 7 項目であった。

アンケート（2）は，一人の「気になる子ども」に対して一枚，担当の保育者が直接記入する方式とした。項目は,「気になる子ども」の（a）現在年齢と性別,（b）気になる事柄の種類（複数選択可）,（c）気になる事柄の自由記述,（d）気になり始めた年齢,（e）保護者の認識,（f）専門職との連携,（g）園内支援体制,（h）連携希望専門職種等の計 8 項目であった。

アンケート（3）は，アンケート（2）と同様に一人の「気になる保護者」に対して一枚，担当の保育者が直接記入する方式とした。項目は,「気になる保護者」の（a）気になる内容,（b）（a）の回答の具体例,（c）気になり始めた時期,（d）支援の有無,（e）現在の保護者の状況,（f）連携を希望する専門職および専門機関,（g）気になる保護者の子どもの様子の 7 問を尋ねた。本論文では,（a）～（f）までの結果をまとめることとした。

結果と考察

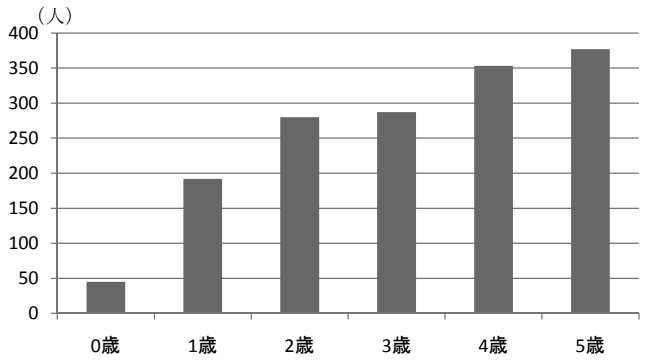
アンケートは，90 園に配布し，そのうち，有効回答は 73 園，回収率は 81.1％であった。まず，アンケート（1）から，データ解釈の前提となる「気になる保護者」の概要を報告する。

「気になる保護者」数をまとめたものが Figure 1 である。Figure 1 に示す通り,「気になる保護者」数は，0 歳児 45 人，1 歳児 192 人，2 歳児 280 人，3 歳児 287 人, 4 歳児 353 人, 5 歳児 377 人であった。0 歳児では,「気になる保護者」数は少なかったが，1 歳児になると「気になる保護者」数が約 3.5 倍に増加し，その後も 5 歳まで増加傾向が継続された。「気になる保護者」の増加する時期は，3 つの段階

にわけることができ，第1のピークが0歳児から1歳児, 第2のピークが1歳児から2歳児, 第3のピークが3歳児から4歳児であった。

保育人数が年齢によって異なるため,「気になる保護者」数だけから問題をとらえることはできないが,「気になる保護者」数の増加は，保育者にとっては気がかりな問題である。0歳児から1歳児にかけて急増する「気になる保護者」には，仕事と子育てのジレンマ（冬木，2002）が影響していると思われる。厚生労働省（2009）の平成20年度雇用均等基本調査によると育児休暇取得率は，女性が90.6%であり，子どもが0歳児の時は，育児休暇をとって在宅保育をしている保護者が多いことが推測される。子どもが1歳の誕生日を迎えると，その日から保護者は職場へ復帰することが求められる。母親の場合は，出産と育児のために長い間仕事から遠ざかっているため，仕事内容の把握に時間がかかり仕事が思うように進まない。育児があるために，以前のように遅くまで仕事に没頭することはできない。このような仕事と育児のジレンマが1歳児の保護者の保育園に対する自己中心的なぼやきや要求につながっているのではないだろうか。

また，保育園という集団の場では，一人が風邪をひけば何人にも風邪がうつり熱を出すことも多い。子ども同士が直接触れ合い，同じ玩具をなめたりくわえたりすれば無理ないことかもしれない。しかし，子どもの急病では，父親に比べ母親が職場を休むなどの環境調整を余儀なくされる場合が多い（勝木・森川・井上，2008）。母親は子どもが急病になるとそのたびに職場から呼び出され，子どもを病院に連れて行き，病気の子を看病して仕事を休むことになる。このような母親の行動に対して職場の見る目は厳しいため，母親は不安定になりいらいらした気持ちのはけ口を保育者や子どもに求める結果，1歳児の保護者には「気になる保護者」が多いと考えられる。



注）数値は，各年齢の人数

Figure 1 「気になる保護者」の年齢別人数

1歳児から2歳児にかけての「気になる保護者」数の増加は，子どもが人間として育ち始める時に起こる方向付けの問題と関連すると考えられる。1歳児は人間として移動運動の基本である歩くという行動が自立する時である（丸山, 2001）。それによって，保護者が目を離すとすぐにどこへでも自らの力で歩きだし，手当たり次第何でもさわり，口に入れ，危ないこともしばしば起こる。保護者の禁止行動が始まるのはこの時期である。何を禁止し，何を容認するかには，保護者の価値観や生活観が反映され，子どもの育ちを方向付けする。保護者の厳しすぎる禁止行動は，保育者にとっては気になる行動として目に映るのかもしれない。

3歳児から4歳児，5歳児にかけての「気になる保護者」数の増加は，きょうだいが生まれたり，就学前の不安であったり，子ども同士のトラブルであったりと多様な要因が関連すると考えられる。子どもの発達領域の拡大および家族の生活範囲の拡大に伴い，様々なストレスが保護者に生じることとなり，子どもへの不適切な行動が増加するのだと考えられる。

次に，年齢別に見てきたこの「気になる保護者」の内容をさらに詳細に園へのクレーム，夫婦・家族関係，親子関係・養育態度，経済状況，心身の健

康，その他に分類して，項目内容別にみていくこととする。「気になる保護者」の項目内容別の人数は，親子関係・養育態度が 539 人（35％），心身の健康 281 人（18％），夫婦･家族関係 269 人（18％），園へのクレーム 215 人（14％），経済状況 185 人（12％），その他 45 人（3％）であった。「気になる保護者」の内容では，親子関係･養育態度に続いて，心身の健康が上位に上がっており，保護者自身の精神的な問題が子育て家庭において見逃せない問題になっている。

これらの「気になる保護者」の各項目の年齢別人数を示したものが Figure 2 である。Figure 2 に示す通り，「気になる保護者」の園へのクレーム項目では，5 歳児 52 人（24.3％）が最も多く，続いて 3 歳児 46 人（21.4％），4 歳児 40 人（18.6％），2 歳児 40 人（18.6％），1 歳児 23 人（10.7％），0 歳児 14 人（6.5％）となった。園へのクレームは，5 歳児と 3 歳児に多く示された。3 歳児のクレームは，子どもの感情や社会性の発達に起因する場合が多い。子どもは 3 歳になると，自己意識的な情緒が盛んに発達する（柏木，1988）。しかし言葉の発達が未熟なため，自分の感情を言葉で他者に表現したり，自らの感情を客観的に見つめることは不得意である。さらに，3 歳児は自分の欲求を積極的に表すが感情をコントロールする力は身についていない。そこから，友達同士のぶつかり合い，いざこざ，けんかが発生するのである。5 歳児になると，いざこざやけんかを自分たちで解決しようとするが，皆が納得するような解決策を見出すことはできない。結局保育者が中に入り，その判断でけんかは収束することになる。しかし保護者は，子どものけんかを自分の都合のよいように解釈して，自分の子を守り，保育者にクレームを唱えることも多くなってしまうのであろう。

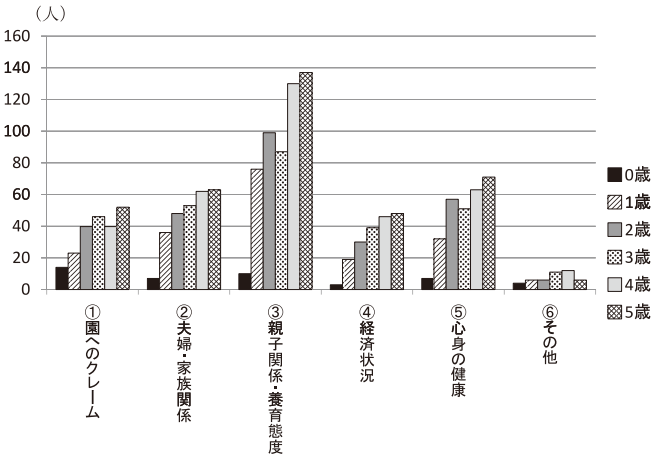
一方，0 歳児では園へのクレームの総数は少ないものの，0 歳児の中で他の項目と比較すると，園へのクレームは最も多いものとなっていた。0 歳児の保護者は，保育園を初めて利用するにあたり，保育園文化そのものになじみがないことや母乳育児絶対主義など自身の子育て観と保育園の子育て観との食い違い（大豆生田，2008）などが生じやすく，その結果が園へのクレームとなって示されたのかもしれない。また，0 歳児の子どもは，多くが第一子のため，保護者には子育て経験がない場合が多い。子どもの世話一つひとつに時間がかかり，自分が行っている子育て方法にも自信がもてず，不安の裏返しとしてクレームという行動が増加するのかもしれない。

夫婦・家族関係項目の「気になる保護者」数は，多い順に 5 歳児 63 人（23.4％），4 歳児 62 人（23.0％），3 歳児 53 人（19.7％），2 歳児 48 人（17.8％），1 歳児 36 人（13.4％），0 歳児 7 人（2.6％）であった。0 歳児では気になる夫婦・家族関係の保護者は少ないものの，1 歳児からは増加の傾向が示された。夫婦関係の発達において，子どもの誕生をきっかけに夫婦の価値観の違いが明確になり，夫婦関係が悪化する場合がある（古畑，1988；大野，2006）。特に子どもの自我が明確になる 1 歳ごろからは，子どもに手がかかるようになるため日常生活に制約感が生じたり，夫婦間で生活上の優先順位の立て方が食い違ったり，子どもの年齢が高まるにつれ子育て方針などお互いの価値観の食い違いが生じたりしやすいのであろう。ゆえに年齢が上がるにつれ，夫婦・家族関係項目の人数が増加するという今回の結果は納得のいくものであろう。

親子関係・養育態度項目で「気になる保護者」数は，多い順に 5 歳児 137 人（25.4％），4 歳児 130 人（24.1％），2 歳児 99 人（18.4％），3 歳児 87 人（16.1％），1 歳児 76 人（14.1％），0 歳児 10 人（1.9％）であった。0 歳児の保護者では，不適切な養育態度

を示す保護者の数は少ないものの，1歳児から2歳児にかけて増加し，その後3歳児で一度低下し，4歳児以降，再度増加する傾向が示された。1歳児・2歳児は，自我が芽生え探索行動などが盛んになり，いわゆる最も手がかかる時期である。そのため保護者の禁止行動が盛んになる。また，2歳児は，歯磨き，排泄，睡眠，衣服の着替えなど人間的な生活習慣を形成し始める時期である。これらの生活習慣は毎日根気よく行うことが大事だが，子どもは気が向かないとやりたがらず「いやだ」と拒否する。一つひとつの行動を遂行するのに時間がかかるので，保護者はいらいらすることが多くなる。保護者の不快感情は高まり，子どもを力で抑えようとするなど，保育者にとって，保護者の気になる行動が目につくのだと思われる。しかし子どもが3歳になると，子ども自身の言葉の理解力や自己コントロール力（柏木，1988）が少しずつ培われ，保護者としても子どもを扱いやすくなる。その結果，保育者から見た保護者の「気になる行動」が減少するのであろう。

経済状況項目の「気になる保護者」数は，どの年齢にも一定数見られ，年齢が上がるにつれ，徐々に経済状況が悪化している様子が示された。これは，きょうだいが誕生することで，出費が増えたり，出産により仕事を正職からパートへ変えざるを得なかったりするなど，なんらかの環境的な変化が関連すると予想される。



注）数値は，各年齢の人数

Figure 2 「気になる保護者」の項目別人数

最後に心身の健康状態項目の「気になる保護者」数は，多い順に5歳児71人（25.3％），4歳児63人（22.4％），2歳児57人（20.3％），3歳児51人（18.1％），1歳児32人（11.4％），0歳児7人（2.5％）であった。心身の健康状態では，年齢が高まるにつれて，問題のある人数が増加した。1歳児から2歳児にかけては，約2倍の人数となり，その後3歳児で一度減少し，4歳児，5歳児と再び増加の傾向を示した。これは，親子関係・養育態度と類似する結果となった。つまり子育て家庭にとって，2歳児の子育ては，負担感が強く，子どもに対して不適切な対応をしてしまうとともに，保護者自身の体や心にも負担感が生じやすいことが明らかとなった。

「気になる保護者」の各項目の特徴

次に，「気になる保護者」の各項目に関して，具体的なエピソードをTable 1に示した。各エピソードを熟読し，その内容を筆者らの合意のうえ，いくつかの項目に分類した。Table 1に沿って，「気になる保護者」の特徴を概観する。

園へのクレーム

園へのクレームの内容を，保護者の自己中心性／幼児性，サービス主義，価値観の固定化に分類した。はじめに自己中心性／幼児性についてだが，保護者が園に対して，自分の要求を押し通す姿やその要求が満たされなかった際の感情コントロールの難しさが示された。サービス主義では，「すべて保育者にやってほしい」など，保育料金を払っているために，その対価に見合ったサービスを受けるのが当たりまえであるというような意識がうかがえた。また，価値観の固定化では，現在さまざまな子育て観が提唱されているため，園の方針を受け入れずに，自己の子育て観を主張する傾向が示された。

Table 1　気になる保護者に関する自由記述

項目	具体例
園へのクレーム	
自己中心性/幼児性	
	＊午睡用の布団にシーツをかける時，下から取り出すのは大変なので一番上に置いてほしい。
	＊自分や子どもに対する声かけが母の考えている範囲の中で少しでも許せない内容に対して，感情的な態度で怒鳴りこんでくる。
	＊友達関係や体調，他児の親について，時々文書での訴えを起こすことがある。
	＊確認したいことがあり，担任以外の保育士に伝言を頼むと，何かと怒って返答したりする。
	＊園で服等を汚してしまったことに関して謝罪をしたが，激怒し何度も電話でクレームを言う。
サービス主義	
	＊子どものことに対してはすべて保育士にやってほしいという要求が高い。
価値観の固定化	
	＊おやつにようかんが出た時に「１歳には甘すぎる」ということで，自分の子どもには食べさせないでほしいとの話があった。
	＊児童教育に関する仕事をしているために，自分の育児方針に固執して，園からの助言を素直に受け入れられない。
夫婦・家族関係	
	＊父，母の国籍が異なるため，しつけの方法が違いすぎる。
	＊DVを受けている。
親子関係・養育態度	
虐待傾向	
	＊首に傷が見られた。子どもに手をあげてしまうことがある。
	＊母親の気持ちの波が激しく，機嫌が悪くかっとしやすい。
	＊母の言うとおりに行動しなかったり，本児の行動が遅いと「ぶっ殺すぞ」「ふざけるな」などの強い言葉も聞かれる。
	＊子どもに対して，ひどく罵倒し，休み明けには傷を作って，登園することがある。
忙しすぎ	
	＊7月は私用休みが一度もなく，日，祝日以外は園へ預けている。仕事の関係で祖母に預けていることも多く，9月は5日ぶりに親子で顔を合わせたということもあった。
母親孤立	
	＊外に公園などへ出かけても，父親は少し遊んで一人だけ車に戻ってしまうとのこと。
自己中心性/幼児性	
	＊保護者の気分で保育園に来たり，来なかったりする。手紙は全く読まない。あまり人と接したがらず，会話が続かない。
	＊価値観がずれている。一般常識が通用しない。
	＊大人中心の生活を送っている。
	＊子どものことで注意したと話をすると「首を絞めて殺してください」などの発言をし，心の底からこちらの伝えたいことを理解しようとする姿勢が見当たらない。
	＊登園時，ぐずっている子を「きらいなのよね」という。
生活面	
	＊提出物などは再三催促しないと提出がない。
	＊手紙などを全く読まず，いつまでもおたより帳にはさまっている。ハンカチやシーツなど，洗濯をせずにいることが多い。
	＊着替えのストックがいつも足りない。
	＊無断で欠席する。
	＊生活リズムをつくれない。
	＊規則正しい食事が与えられない。
	＊定職につけず，家にいることが多いため，連絡なく長期欠席をする。こちらが連絡をとってもつかまらず，なかなか連絡が取れない。
	＊家でもコンビニのごはんが主である。
発達に応じていない対応	
	＊子どもの接し方がわかっていない。４歳になる子に対して，何でもやってあげる。着衣，食べるなど母親がほとんどやってあげている状態。
経済状況	
	＊安定した仕事についていない。
心身の健康	
	＊一歳児より母親がうつ病ということで入園。はじめは祖母が必ず一緒につき，母親も笑顔もなく送り迎えをする。
	＊精神的に不安定であり，精神安定剤や睡眠薬を服用している。
	＊母親が気分的に沈んでしまった時に自殺願望やリストカットがみられる。
	＊リストカットをしてしまう。
	＊お酒と薬を一緒に飲み，救急車で運ばれる。
	＊母親の知的レベルが低い。
	＊園からのお願いごとや行事に関することを口頭や「お知らせ」で連絡しても母親の心理状態により，解釈，理解のされ方が別の方向だったりしてスムーズに伝わりにくい。
	＊連絡ノートの内容が子どもではなく，母親自身のことだったりすることが多い。
	＊送迎の際，母親に笑顔が見られない。話をきいてあげたり，アドバイスをすると，すぐに泣いてしまう。話すことが人によって変わったり，作ったりする。
	＊子どもの悪口を言われたと，訴え悩み，精神的に不安定となる。
	精神的な不安定さがあり，調子が悪い時は子どもを休ませがちになる。
	＊母親：人格障害，父親：高次脳機能障害で，コミュニケーションをとることが困難なことが多い。
	＊母親はうつ病で薬を飲んでいるため，睡眠パターンが一定していない。
	＊その影響で園児の生活リズムも一定したパターンが持てない。
	＊酔っ払った状態で迎えにきて，急に泣き出す。

夫婦・家族関係

夫婦・家族関係については，DV（domestic violence）や夫婦の価値観に関する問題が示された。いわゆるDVの問題については，各機関とも連携を取りながら，子どもたちを含めた家族全体の支援を考えていくことが，これからの保育現場ではますます求められる。また，夫婦間の価値に関する問題では，たとえば，足立区は外国人登録者が23,314人と都内では第3位（東京都，2009）であるという特徴が反映され，「父，母の国籍が異なるため，しつけの方法が違いすぎる」というように，多国籍がもたらす子育てに関する価値観の不一致が示された。

親子関係・養育態度

親子関係・養育態度については，虐待傾向，忙しすぎ，母親孤立，自己中心性/幼児性，生活面，発達に応じていない対応，その他に分類された。虐待傾向については，「ぶっ殺すぞ」などという言葉による暴力や「休み明けには傷をつくり保育園にくることがある」など身体的暴力に関するコメントが示された。忙しすぎに関しては，「5日ぶりに親子で顔を合わせた」など，勤務状態が忙しく子どもと過ごす時間がほとんどない様子が示された。また母親孤立では，「外に公園などへ出かけても，父親は少し遊んで一人だけ車に戻ってしまう」など，父親の協力が得られない様子が示された。自己中心性/幼児性に関しては，子ども中心ではなく大人中心の生活を送っている様子，また園から配られた手紙を読まないなど，保護者としての責任を果たしていない様子が示された。生活面に関しては，連絡なしに園を欠席する，食事はコンビニの食事を中心とする，着替えがそろっていないなど生活面が整っていない様子が示された。発達に応じていない対応については，「4歳になる子に対して，何でもやってあげる」など，保護者が子どもに過剰に手をかけてしまっている様子が示された。

経済状況

経済状況に関しては，「安定した仕事についていない」などのコメントが示された。

心身の健康

心身の健康に関しては，母親自身に精神的疾患を抱えているケースが目立ち，そのための感情コントロールの難しさが示された。

以上，「気になる保護者」の内容は多岐にわたるものとなった。人間の発達的観点から考えると，子どもの発達の領域が拡大していくとともに，また夫婦としての発達がなされていくにつれ，様々な葛藤が生じ保護者の気になる行動が多くなっていくことが示された。自由記述の内容からは，保護者の気になる行動に対して，保護者自身も苦しんでいる様子や保育者が対応に苦慮している様子がうかがえた。今後「気になる保護者」への対応としては，保育者のコミュニケーションスキルを高めていくこと，保育者を精神的にサポートする体制づくりをすること，他機関との連携をはかること（望月ら，2008）などが求められる。

保護者の様子が気になり始めた時期と支援の実態

保護者の様子が気になり始めた時期をFigure 3に示した。これによると，気になり始めた時期は，1年以内が60人（34.7％）と最も多く，続いて1年以上～2年未満以内43人（24.9％），2年以上～3年未満以内33人（19.1％）であり，気になり始めた時期が3年以内であることが全体の約80％となった。

「気になる保護者」の中で，すでに支援を受けている人数は154人（73.3％），支援を受けていない人数は45人（21.4％），無回答は11人（5.2％）であった。また，支援を受けることで，良好に変化した人数は24人（11.1％），現状維持は160人（73.7％），悪化は13人（6.0％），回答なしは20人

（9.2％）であった。以上より，「気になる保護者」の約 73.3％は，行政や医療，福祉などなんらかの支援を受けている実態が示された。しかしながら，21.4％は支援を受けておらず，さらに 3 年以上気になっていると答えたケースが約 20％あることから，長期間にわたり気にはなっているものの適切な支援が受けられていないケースがあることが推測された。

今後連携したい専門職や専門機関

保育者が今後連携したいと考える専門機関や専門職を Figure 4 に示した。Figure 4 の通り心理士が最も多く 71 人（29.7％），続いて精神科医 46 人（19.2％），さらに児童相談所 31 人（13.0％），ソーシャルワーカー 24 人（10.0％），足立区施設 23 人（9.6％），その他 15 人（6.3％），社会福祉事務所 14 人（5.9％）となった。その他の内容としては，子ども家庭支援センター，保健所，園医，医療機関，学校，子育ての仲間づくりの場所などが挙げられた。保育現場が連携を求めている専門職としては，心理士と精神科医が上位であり，臨床的知見をもった専門的支援が急務であることが明らかになった。

総合考察

本研究では，保育現場における「気になる保護者」に関する実態調査を行った。その結果，「気になる保護者」の項目の養育態度と心身の問題の人数は，両者が連動して 2 歳児と 4 歳児，5 歳児で多いことが明らかになった。特に気になる保護者が目立ちはじめる 2 歳児は，他の保護者も潜在的にストレスの多い時期であると予想される。つまりこの 2 歳児の時期に保護者への支援を重点的に行うことが，有効ではないかといえる。2 歳児という早期に，子どもへの適切な関わり方を保護者が学習することで，結果的に 4 歳児や 5 歳児での不適切な対応が減少するのではないだろうか。近年，ペアレント・トレーニングなど，よりよい子どもとの関わり方を学べる方法が開発されている（上林・北・河内・藤井，2009）。保育現場でこのペアレント・トレーニングの導入を検討することも一つの支援方法であると考える。さらに，近年，保護者支援として保育カウンセラーが保育現場で活躍しつつある。保育現場が連携を求めている専門職として，心理士がトップに挙げられていることから，スクールカウンセラー事業と同様に，保育現場の全園を対象とした保育カウンセラーの配置を期待したいものである。

次に「気になる保護者」の園へのクレーム項目に関しては，0 歳児ではクレームの総数は多くないものの，0 歳児の中の他の項目と比較すると園へのクレームの割合が最も高いことが明らかとなった。しかしながら，0 歳児以降，年齢別にみると他の項目

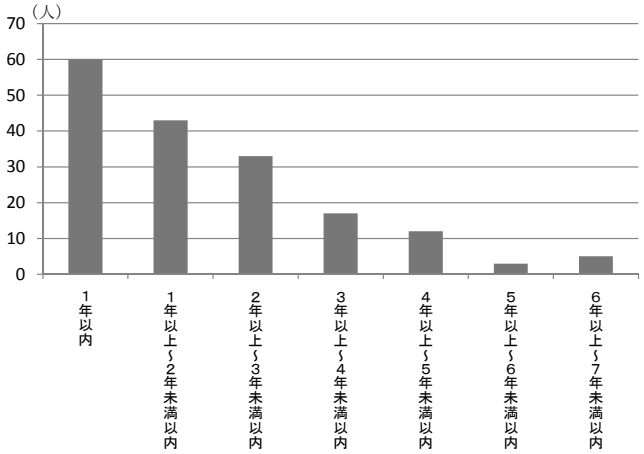


Figure 3　保育士が保護者の様子を気になり始めた時期

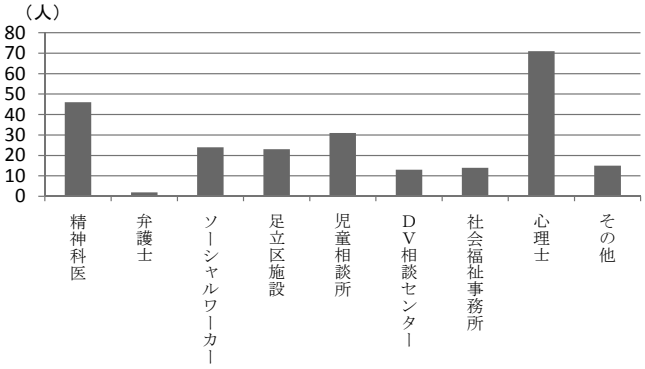


Figure 4　今後連携したいと考える専門機関や専門職

と比較して園へのクレームの割合が減っていることから，多くの保護者の傾向として，入園当初はなれない保育園に対してクレームを言うものの，その後は保護者自身が保育園の文化に適応し，クレーム数も減少してくることが予想される。このことから0歳児のクレームに関しては，保育者側も丁寧に保護者と保育者との子育て観のすり合わせを行いつつ，そのクレーム自体に過度に反応せずに，また保護者を責めすぎたりせずに受容的に対応することが求められる。

一方，子どもが幼児期にさしかかった場合の保護者による園へのクレーム数は，友達との相互作用が活発になる3歳児に多かった。したがって，もし0歳児でのクレーム対応がうまくいかず，保護者が園に対する不信感を募らせているのであれば，この3歳児でのクレームでは，保護者のクレーム行動は強硬になる可能性もありうる。0歳児でクレームを示した保護者には，その後も丁寧にフォローアップしていくことで，事前に大きなクレームを防げることにつながるかもしれない。また園へのクレーム件数は，3歳児と5歳児が多いという今回の特徴を踏まえながら，これらの年齢では，保護者会を早めに設定して，保護者の思いを受けとめたり，保護者と保育者の価値観のすり合わせを行うなど，予防的な支援を行うことが求められる。小野田（2008）は，学校と保護者の良好な関係性構築のためのワークショップを実践している。このような研修会を通して，保護者の立場に立ち保護者の要求の背景を読み取ることで，保護者と保育者のコミュニケーションを円滑にすることもクレームを減らす一助となろう。

保育園は，児童福祉法上，子どもの福祉を図る児童福祉施設として位置づけられている。しかし，新エンゼルプランでは，保育園は親の福祉を図る社会資源として位置づけられた。その結果，現在，保育園は保護者の福祉と子どもの福祉という，言うなれば車の車輪の上に乗った車体のような存在になっている。保護者の福祉を優先するか，子どもの福祉を優先するかという対立構図では，「気になる子ども」の問題も「気になる保護者」の問題も解決には向かわない。

保護者も子どももよりよい生活が営めるように，保育園は保護者と子どもの育ちと生活を支援する施設として位置づけなければならない。そのために，保育現場では多様な価値観を認め，各人がもっている子育て観や教育観を理解しながら，寛容的に対処していくことが求められる。このことは，無藤（2008）によっても「多様性を尊重し，同時に子どもの幸せと発達を正当に擁護をしなければならないと」と述べられている。「気になる保護者」の問題は，保護者と子どもの well-being を求めて，社会のありように変化を求める課題提示として捉えられるのである。

本研究の課題

最後に，今後の課題として，調査そのものの課題と今後の支援のあり方という2点について述べたい。はじめに，調査に関してだが，本研究は，東京都の足立区で実施した調査であり，その地域性による特性が反映されている可能性が高く，本調査の結果を一般化して結論づけるのは難しい。また，本研究の主な対象は，公立保育園および私立保育園という保育現場を中心としたものであった。久保山ら（2009）の研究では，「気になる保護者」の内容について，幼稚園と保育園の違いを指摘しており，これらの結果から，やはり保育園と幼稚園では，「気になる保護者」の内容が異なる可能性が高く，今後幼稚園と保育園の違いを明確にすることで，より保護者のニーズに応じた的確な支援が可能になるといえる。

次に「気になる保護者」に対する支援のあり方に

ついてだが，保育現場では，保護者への対応として心理士や精神科医によるアドバイスを求めていることが明らかとなった。大学の役割としては，定期的に保育者を対象とした研修会を実施したり，教員が保育現場に出向いて，巡回相談や園内研修を行ったりする支援なども有効であると考えられる。筆者らによる本大学の保育特別支援研究グループでは，2009 年度夏に保育者と保護者を対象としたペアレント・トレーニングの研修を実施した。このように保育者の専門性を高めるための研修機会を提供することも大学の重要な役割の一つだと考える。今後も地域のニーズに即した保育者と保護者のための支援を模索していきたいと思う。

附記

本研究は，2008 年度および 2009 年度の東京未来大学共同研究費による助成を受けた「保育特別支援研究グループ」による研究成果の一部である。

謝辞

本研究のアンケート調査を行うに当たり，アンケートに丁寧に回答してくださった足立区内の公私立保育園の関係各位に，記して謝意を表します。

引用文献

足立区（2009）．平成 20 年外国人登録者 <http://www.research.tokyo-23city.or.jp/home22files/adachi.pdf>（2010年1月5日）

古畑和孝（1988）．インティマシー（親密）の社会心理学　平木典子（編）　講座　社会心理学2　夫と妻［その親密化と破綻］　金子書房　pp. 279-281
(Furuhata, K.)

冬木春子（2002）．乳幼児をもつ親の「仕事と子育ての両立」をめぐる現状と課題：三重県北勢・南志地区のデータ分析を通じて　地研年報，7, 79-69.
(Fuyuki, H.)

柏木惠子（1988）．幼児期における「自己」の発達　東京大学出版会
(Kashiwagi, K.)

勝木洋子・森川紅・井上裕子（2008）．保育所の早期保育と働く母親の現状　兵庫県立大学環境人間学部研究報告, 10, 113-119.
(Katsuki, Y. , Morikawa, K., & Inoue, H.)

厚生労働省（1999）．新エンゼルプランについて <http://www1.mhlw.go.jp/topics/syousika/tp0816-3_18.html>（2010年1月5日）

厚生労働省（2009）．「平成20年度雇用均等基本調査」結果概要 <http://www.mhlw.go.jp/za/0818/d02/d02.html>（2010年1月5日）

久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳（2009）．「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査―幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言―国立特別支援教育総合研究所　研究紀要，36, 55-76.
(Kuboyama, S., Saito, Y., Nishimaki, K., Toushima, S. Fujii, S. & Takigawa, K. (2009). Survey on awareness of and response to “children of concern” and “parents of concern” by preschool teachers and child-care providers: Considerations in providing organizational support to preschools and child-care centers. *Bulletin of The National Institute of Special Needs Education,* 36, 55-76.)

上林靖子・北道子・河内美恵・藤井和子（2009）．こうすればうまくいく発達障害のペアレント・トレーニング実践マニュアル　中央法規
(Kanbayashi,Y., Kita, M., Kawauchi, M., & Fuzii,

K.)

丸山美和子（2001）．発達のみちすじと保育の課題　萌文社

(Maruyama, M.)

望月初音・北村愛子・大久保ひろ美・田邉千夏・小尾栄子・塙晶子（2008）．子ども虐待の早期発見・予防に関する研究―保育士が子どもの虐待を疑った時の対応で苦慮していること―　つくば国際大学　研究紀要，14, 175-188.

(Mochizuki, H. Kitamura, A. Okubo, H. Tanabe, C. Obi, E. and Hanawa, A.(2008). Inbestigation about Early Detection and Prevention of Child Abuse: Correspondence for the Child Abuse Suspected of Nursery Staffs and the Point That They Are Worried about. *Bulletin of Tsukuba International University,* 14, 175-188)

無藤隆（2008）．子育て支援・保護者との連携の現在とこれから　教育心理学年報，47, p.23.

(Muto, T.)

大豆生田啓友（2008）．幼稚園・保育所における親とのかかわりに関する調査―種別の違いに着目して―

人間環境学会『紀要』．9, 51-66.

(Ohmameuda,H.(2008)　The Survey about Relationships between Kindergartens, Nursery Schools and Parents - To Pay Attention to each Classification - *Kanto Gakuin University Society of Human and Environmental Studies Bulletin*. 9, 51-66.)

大野祥子（2006）．親としての発達　柏木惠子・平山順子・大野祥子著　家族心理学への招待　ミネルヴァ書房　pp.149-156.

(Ono, S.)

小野田正利（2008）．学校と保護者の良好な関係性構築のためのワークショップ実践　日本教育経営学会紀要，50, 82-90.

(Onoda, T.)

重田博正（2007）．保育者のメンタルヘルス　かもがわ出版

(Shigeta, H.)

竹内貞一・坪井寿子・藤後悦子・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子（2010）．保育園における「気になるこども」の現状と支援の課題―足立区内の保育園を対象として―東京未来大学紀要，3, 77-83.

(Teiichi Takeuchi, Hisako Tsuboi, Etsuko Togo, Teruyo Fukawa, Mayumi Tanaka, Keiko Sasaki (2010). Today's Situation and Problems of the Support to “Problem Children” in Day-care Centers in Adachi Ward, Tokyo. *Tokyo Future University Bulletin*, 3, 77-86.

東京都（2009）．東京語住民基本台帳

<http://www.toukei.metro.tokyo.jp/juukim/jm-index.htm>（2010年1月5日）